

子育てにおける母親の自信獲得までのプロセス

—乳児をもつ高齢の母親に焦点をあて—

宮本 桃英・堀 由里

Mother Gain Confidence Process in Child Rearing : Focus of Older-Aged First-Time Mother Whose Child is Infant

Momoe MIYAMOTO and Yuri HORI

1. 問題と目的

子育て支援のひとつの意義として、保護者が自信をもって育児ができることを支援するというものがある。自信をもつために、もしくは自信をもっている心の状態とは、保護者自身が安心している、気持ちが穏やかである、生き生きとしているなど、さまざまな状態が考えられる。さらにいえば、何かあったとしても自分なりの方法で何とかなるだろうという安心がある状態とも考えられる。ただし、保護者が出産後から自ずとこのような気持ちになるわけではない。一人ひとりの母親が自分の育児を経験していくなかで、このような気持ちに至るのではないかと考えられる。

宮本・安田・吉村 (2017)¹⁾ は、子育て支援を利用する0歳から2歳までの子をもつ母親20名の子育てに関する質問紙調査およびインタビューを通して、母親の養育行動について語られた言葉から、養育者が子どもとの関係性をどのように捉え、養育行動を決定しているかなどそれらの傾向にみられる主体性を検討した。子育ての中でつらかったこと、つらい時期の体験というエピソードから、母親が子育てにおいてさまざまな物理的・心理的困難や問題を抱えたとき、自らの気持ちを「切り替え」「あきらめる」という子どもと物理的・心理的に距離を置くという方法をとって自分の主体としての感覚を守り、無理に母親としてあるべき姿にとらわれることなく、それが自分の子育てのスタイルなのだと思いが決断した方法を自分で引き受けしていると考えられた。

同様の研究に、浅賀・三浦 (2011)²⁾ は、育児において母親が抱える葛藤や問題を取り上げ、母親としての発達という観点から、母親が育児において体験しうる心理的混乱をどのように乗り越え、その結果どのような変化が起こりうるのかについて検討している。分析の結果、母親役割が内在化される時期に至るには3つに分けられ、自己存在の揺らぎを克服し、母親役割を自らに位置づけることができ、心理的に母親になっていく過程が明示された。

池田 (2013)³⁾ の研究では、母親のライフスタイル選択に関与している要因、子育て期の葛藤の要因、子育ての負担感の要因が明らかとなり、選択したライフスタイルの実践においては、母親自身が抱える葛藤あるいは負担感を軽減する方向にライフスタイルを見直しながら、子どもの成長とともにそれぞれのライフスタイルの継続あるいは変更しながらスキのステージに移行していくプロセスであることがわかった。

赤尾・山野 (2012)⁴⁾ の研究では養育者が子育てに行き詰まり脱出するプロセスを明らかに

するための検討がされ、分析の結果、母親が子育ての行き詰まりから脱出するプロセスは日常的な子どもへの関わりのなかで、「子どものため」とらわれ感を基盤に相互に影響し合う物理的支援の欠如、精神的つながりの欠如、受け入れがたい子どもの行為が生じることによって、行き詰る、そして、ほっとするを繰り返しながら、ほどほどの子育てをつかむことを確実なものにすることであった。

山野ら (2013)⁵⁾の研究ではM-GTAによって作成された「子育ての行き詰まり感が高まったり、軽減したりするプロセス」モデルを母親、子育て支援者に調査し、子育ての行き詰まりの状況と要因の理解、その普及を図るとともにM-GTAの実践的活用を試みている。その結果、高い率で母親たちはモデルが参考になったと感じ、自身の具体的体験と照らして振り返るなど実践的活用に有効であったことが明らかにされた。

しかし、母親が自信をもって子育てができるようになるには、つらい経験を乗り越えるだけではなく、子育てのなかで経験する喜びや楽しいというようなポジティブな感情も影響するのではないだろうか。そこで本研究では、子育ての中で楽しい・楽しかったことと時期も含めて母親の気持ちがどのように変化していくのかを明らかとし、母親としての自信を獲得するまでのプロセスを検討する。

ところで、現在の日本では女性の社会進出を背景に、結婚・出産が高齢化し、不妊治療に取り組む夫婦も多い。しかし、不妊治療を受けた母親が産褥期に抑うつ傾向を示したり (横山、2002)⁶⁾、自尊感情や自己効力感が低下するという例も報告されている。

そこで本研究では、高齢出産をした母親が、子育てに希望をもち臨んでいけるようになるまでのプロセスを明らかにすることを目的とする。そのようなプロセスを理解することは、高齢出産した母親への子育て支援に役立つと考えられる。

2. 方 法

(1) 協力者

名古屋市内民間保育所が開催する子育て支援に参加している0～2歳の子どもを持つ母親を対象に「育児」について調査を行った。そのうち出産時の年齢が35歳～39歳の母親3名を分析対象とした。いずれも第一子 (1歳代) を子育てしている。

(2) 質問紙・インタビュー調査の手続きおよび倫理的配慮

2016年3月、4回にわたって子育て支援に参加している母親に調査への協力を呼びかけ、方法・内容に同意を得られた協力者に対して質問紙及び面接による調査を実施した。手順としては、質問紙への記入に続いて、回答内容にそって1対1の半構造的面接法によりインタビューを行った。なお、インタビューの内容は協力者の同意を得た上で、ICレコーダーにより録音した。

質問紙調査は、〈1〉母親自身の状況に関する質問 (①産時の年齢、②仕事の有無、③相談相手の有無、④インターネットでの情報収集)、〈2〉子について (①月齢、②出生時体重、③兄弟の有無)、〈3〉子育ての状況について (①子育て支援に初めて出かけた時期と場所、②出生前に描いていた生活と今の生活：選択肢は楽しい・うれしい・つらい・大変・びっくり・眠い・面倒・らく・かわいい・のんびり・自由がない・その他、③子育ての中で楽しい・楽しかったことと時期、④子育ての中でつらい・つらかったことと時期、⑤子育てについての迷い

や悩み)である。

面接調査の内容は、質問紙調査の〈3〉について記述内容を確認したうえで、③-⑤についてのインタビューを行い、録音内容についての逐語録を作成した。

(3) 分析方法

データの分析方法は、修正版グラウンテッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTA）を採用した。M-GTAは、人と人の相互作用の動きを説明することに有効であり、その強みは、既知の部分を含みながらも、すでに理解されている形ではなく、別の視点から意味付けることで経験的知識の再構成につながる（木下、2003）⁷⁾。またM-GTAは、実践的活用を一つの特徴としており（木下、2007）⁸⁾。本研究においてM-GTAを採用するのは、自信をもって子育てに向かうに至る母親の心理的変化や状態を理解したうえでの実践的な支援を目指すためである。

分析手順については次に示す。分析テーマは「子育て中の感情や思考」とした。育児におけるたのしい体験、つらい体験などすべてを含めての対象者の心の動きや心理的変化について着目、①インタビュー調査で語られたデータの逐語録を読み込んだ。②分析テーマに着目し、その箇所のコンテキストの解釈を行った。すなわち母親自身がその内容をどう意味づけているのかの解釈を行った。③語られた内容ごとに、分析ワークシートを作成して概念名と定義づけを行った。④概念生成を行いつつ、他のデータから類似例や対極例を探し、概念を精緻化していった。⑤分析過程で生じた疑問やアイデアは理論的メモとして残した。⑥生成した概念をカテゴリー化した。さらに概念同士の関係を図にしながら、カテゴリー生成を行い、モデル図の作成を行った。

ここでは〈妊活の大変さ〉という概念の生成のプロセスを例示する（表1）。まず「できるまでの方がつらかった」という語りに着目し、類似例を探したところ「やっぱり周りから言われたりとかそういうことも多いので」という語りが見つかった。定義は「なかなか妊娠することができない焦りや苦労」とし、〈妊活のたいへんさ〉と命名した。なお、分析の過程では複数の解釈の可能性がある。また、概念、カテゴリー、大カテゴリーの生成に際して、概念同士の関連や対極例の検討、および未生成の他の概念の可能性について十分に検討を行うとともに、分析は本稿2名の執筆者で行い、恣意性の排除に努めた。

表1 分析ワークシートの例

概念 No.	No. 1
概念名	妊活の大変さ
定義	なかなか妊娠することができない焦りや苦労
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・病院とかにも通っていたので ・できるまでの方が辛かった ・産まれる前の方が色々ストレスがかかったり大変だった ・ずっと不妊治療してた ・やっぱり周りから言われたりとかそういうことも多いので
理論的メモ	現在の子育てへの思いの背景に、不妊治療の苦労があると考えられる

3. 結果と考察

M-GTAによる分析の結果、2つの大カテゴリー、12のカテゴリー、35の概念が生成された。35の概念をカテゴリー化したものの関係をモデル図として図1に示す。(以下、概念は〈〉カテゴリーは【】大カテゴリーは■で表す)。

モデル図に沿って母親の心理的变化について説明をすると次のようになる。出産後、母親には【子どもの存在の喜び】の気持ちを実感し、しだいに、わが子の【発達の喜び】と同時に【発達の大変さ】を経験するようになる。この【発達の喜び】と【発達の大変さ】をまとめて子どもの発達という大カテゴリーを考えた。【発達の大変さ】から、【子育ての苦痛】という母親にとって育児における辛苦の時期を体験することになる。この辛苦には【ソーシャル・サポート】(サポートが得られないなど)や〈自己防衛〉などの母親のパーソナリティも影響する。この辛苦を何とかしたい思いから【一般的な問題解決】を図る。【子育ての苦痛】と【一般的な問題解決】を繰り返しながら、母親に【切替】が起こる。この【切替】には、【子育ての苦痛】と同様に、【子どもの発達】【ソーシャル・サポート】母親のパーソナリティが影響する。一方では、【切替】を通して【個別の問題解決】が図られる。一般論の子育てをこえて「私なりの子育て」「私ならではの子育て」の心理状態に移行する。その後、【母親であることの意識】が明確になり、子育てに対して、わが子に対する思いが【希望・期待】へと変容していく。これらのカテゴリーは直線的に進むのではなく、カテゴリー間を循環しながら母親の子育ては営まれる。では次に、以上に述べた心理的变化の各項目について検討する。

3-1. 出産にまつわる【子どもの存在の喜び】と子どもの発達

この度の調査協力者は高齢出産に分類される母親であったこともあり、出産に至るまでが容易ではなかった状況があった。〈妊活の大変さ〉にも表れている。そのためか、子どもを授かったこと自体に深い喜びを感じ、わが子が存在してくれていることにもまた深い喜びを感じている。またその喜びは自分自身だけのものではなく、〈他者の喜び〉とあるように、母親の周囲の人々の喜びとなったことに対しても喜びを感じている。〈楽しい気持ち〉には、ずっといて見ることが楽しい、うれしいなどの感情がある。

育児が始まると子どものさまざまな成長に触れることとなる。具体的には、歯が生える、立つ、歩くようになるなどの〈身体〉発達、発育した身体を使って階段の昇り降りなど〈運動〉機能の発達、意思疎通の芽生え、母親を認識していると感じさせるような〈認知〉の発達、こちらからの声かけに反応があるときや初めて言葉を発したときの〈言語〉の発達、笑えるようになったことや表情の動きが感じられるようになる〈情動〉の発達、年下の子どもとも遊べるようになった〈社会性〉の発達、保護者が四六時中見ていなくてもこの子は大丈夫だと思えるような〈自立の芽生え〉などである。以上のような【発達の喜び】で母親は子どもの一つひとつの成長を喜びと実感するようになる。この【発達の喜び】はのちの【切替】が生じるうえでも重要な要因となる。

一方、子どもの発達には喜びとは対照的な【発達の大変さ】を体験する。起きているときは泣きっぱなし、何をしても泣き止まない、夜泣きがひどいときは15回起きることもあったなど〈泣くこと〉では、何で泣いているのかわからない、どうしてほしいのだろう、なぜ泣き止んでくれないのかわからない、どうして泣き止んでくれないのだろうというようなどうしようも

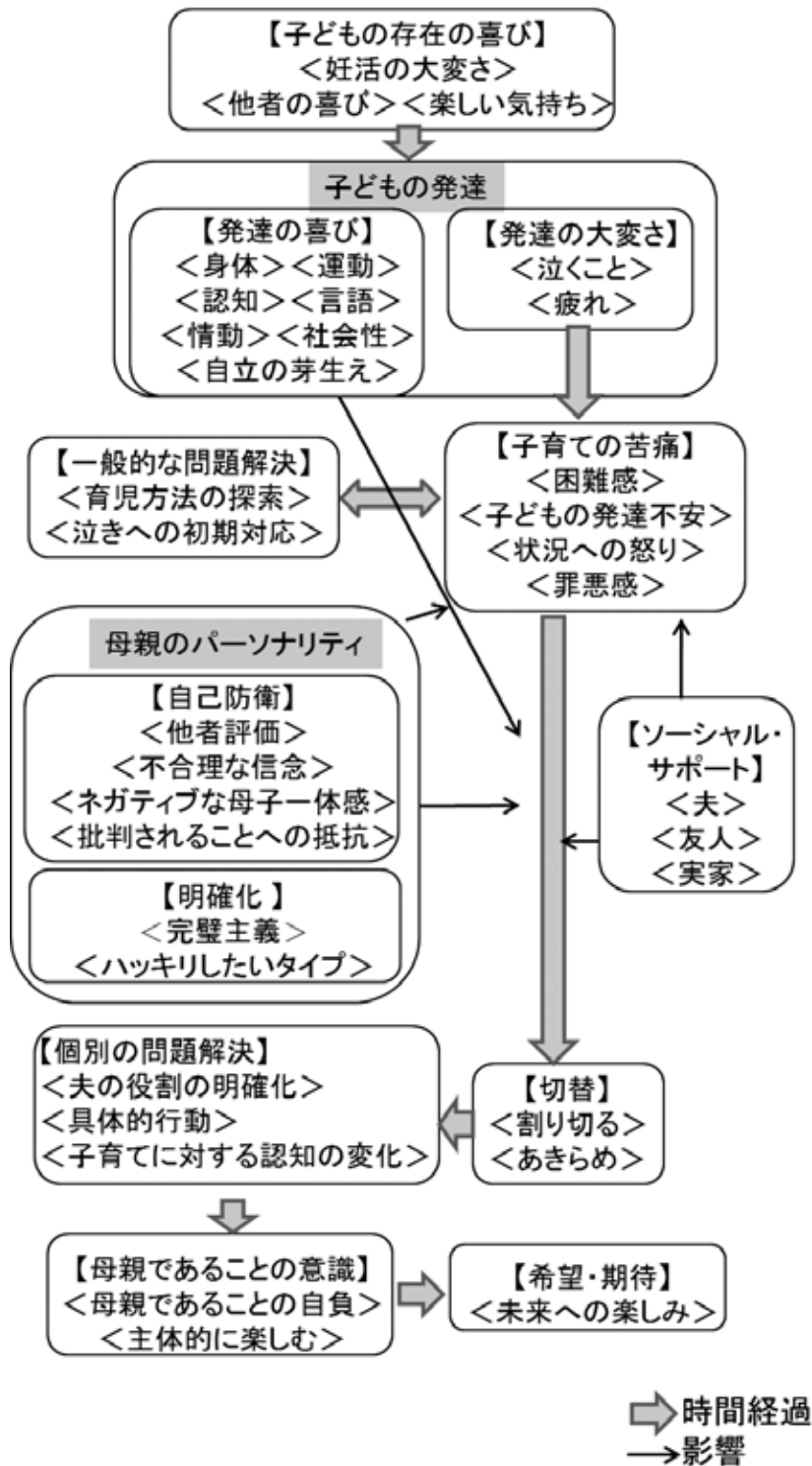


図1 子育てにおける母親の自信獲得までの心理的变化（モデル図）

ない心境に追い込まれることもある。とにかくすごくしんどい、本当に重いというような〈疲れ〉がある。

以上のように子どもの発達には、喜びとたいへんさが共存している。母親はその両方の間を行き来しながら葛藤を感じ、苦しみ、しかしまた喜びを感じながら育児に臨んでいる。

3-2. 【子育ての苦悩】をどう体験するのか—【一般的な問題解決】へ

【子育ての苦悩】には、さきに述べた子どもの発達の【発達の大変さ】や【ソーシャル・サポート】【母親のパーソナリティ】が要因になると考えられる。

子育ての〈困難感〉には、なんでこんなに泣くんだろう、どうしたらいいんだろう、というどうしようもないやりきれなさや行き詰り感がある。周囲の子の発育の様子と違うと感じるような〈子どもの発達不安〉が語られた。同時に、時間通りに進まないことや、とにかく寝られないことに対する〈状況への怒り〉が生じ、誰に対する・何に対するという怒りというより状況の困難さに対する漠然とした不安を根拠とする怒りとも解釈できる。しかし母親の不安や焦りに対する気持ちと同時に、それが子どもに伝わっているのではないかという心配や怒ってばかりいる自分が嫌だと感じるような〈罪悪感〉も含まれる。

【子育ての苦悩】に影響する【ソーシャル・サポート】は〈夫〉、〈友人〉、〈実家〉とした。〈夫〉は子どもの面倒をみてくれようとする、泣き止まないことにイライラする夫の姿を見ることは楽しくない、音を立てて寝返りを打つなど配慮のなさという妻にとっては満足のいかない対応をする側面も含んだ。

あるいは同じ現象についてもどう感じ捉えるかについては【母親のパーソナリティ】も影響する。家族の様子をうかがい気にかけてしまう〈他者評価〉、ダラダラする自分ではいけない、自分が健康でいなければいけないなど〈不合理な信念〉などの母親の【自己防衛】的なパーソナリティがあげられた。この場合、子育てを自分で背負い込んでいるとも解釈できる。〈ネガティブな母子一体感〉は、子どもと自分だけならいい(周囲に気を遣うことに関して)という意味で、子どもを一人格として尊重するというより、自分が内包するものとして捉えている感じがうかがえた。あるいは、周囲のお子さんと比べてできていないことを他者から指摘されたり心配されたりすることへの抵抗感をあらわす〈批判されることへの抵抗〉があげられる。これは母親の傷つきたくないという【自己防衛】が現れていると考えた。

また、主人に影響がないように何とかしようと思う、時間通りにすることを優先したいという〈完璧主義〉、仕事と生活のオフは切り替えたりなどの〈ハッキリしたいタイプ〉という母親の【明確化】というパーソナリティがある。生活の切り替えができることと、子育てに対する意識のもち方にも影響がでるのではないかと推察される。

以上のようなカテゴリーを経て、この子育ての苦悩の状況を何とか打開したいという思いや、状況を変えたいという思いから、夫や親、友人、保育者などの専門家に相談したり、育児書やインターネットからの情報収集による〈育児方法の探索〉、よいといわれているあらゆる方法を試みる〈泣きへの初期対応〉など【一般的な問題解決】を試みる。ここでいう問題解決は自ら積極的に取り組む方策である。母親だけが状況打開しようとしているわけではなく、【ソーシャル・サポート】【母親のパーソナリティ】がさまざまな要因が影響している。

3-3. 苦悩、喜びの経験から得る【切替】、そして【個別の問題解決】へ

【子育ての苦悩】から【切替】に至る。【切替】の、〈割り切る〉は最初で最後かもしれない、

大変なことも全部経験しとかないともったいない、泣きを乗り切った時に、この先何があっても吹っ切れるという語りが含まれる。もしくは割り切れた結果の心境でもある。この割り切りが起こると、気持ちが楽になり苦悩から解放されるようである。〈あきらめ〉では、例えば子どもの泣きに対して何をやっても状況変化が起これないとき、これはこの時期が過ぎるまであきらめて耐えるしかないという気持ちであったり、その時（泣きがの時期がおさまっていく）がくるまでもがくのはやめようと思えたりする体験である。夫に影響がないようにすることは不可能だと気づくことは、こうでなければならぬという思い込みや過度な気遣いから自由になれることを意味する。答えのない問いについて感情的に思考を続けるのではなく、また直接的な問題解決をするのでもなく、起こっている事象や問題に対して適度な距離をもって捉えることができるようになる。つまり、ここで述べる〈あきらめ〉は、未来に対してどうしようもなくあきらめるのではなく、未来に向かっていくための新たな姿勢だと解釈できる。

さらに、3-2で述べたように【切替】に至るにしろ、至らないにしろ、子どもの発達をどう捉えるか、どのような質のソーシャル・サポートを得られているのか、あるいは現象をどう捉えるか母親のパーソナリティなどの要因が影響する。先に述べたようにそれらの要因の影響の仕方によっては【切替】の状態に至らない、至りにくい状況もある。

【切替】から【個別の問題解決】に至るケースについて述べると、泣いた時や困った時は私(妻)がやるから、子どもが元気のいいとき、機嫌がいいときなどは面倒見てねと夫に提案する(夫の役割の明確化)がなされ、のちの母であることの自負にもつながっていく。役割の明確化と共に、夫と寝室を分けて(朝起床する夫への配慮、自分は昼にも睡眠をとり体力精神力を温存する)生活の仕方を棲み分けするなど(具体的行動)も起こる。更には、一般論の子育てをこえて「私なりの子育て」「私ならではの子育て」という(子育てに対する認知の変化)に移行する。正しい子育て、間違いはないであろう子育てではなく、「わたし」はこんな風にやっぴいこう、これでいい、というように「わたし」という主体が大切にされた心理状態である。

3-4. 【母親であることの意識】を経て【希望・期待】に至るまで

【切替】を経て、【個別の問題解決】のように自分が主体となって、自分なりの子育てのスタイルを感じられるようになると子育てに対して、わが子に対する思いへの変化として【母親であることの意識】が芽生えることになる。(母親であることの自負)自分にしかできないこともある、母親になった喜び、自分が頼られているなどの気持ちである。たいへんなときこそ自分がやりたい、頼ったら勿体ないという思い、最初で最後の経験かもしれないと思うともったいないという気持ちに至ることが(主体的に楽しむ)である。その意識から、子育ては自分だけが担うものではなく素直に、みんなが面倒見てくれて、色んな人に囲まれて育ってくれたらいい(未来への楽しみ)、すなわち【希望・期待】へと変容していく。この変容は、その後生涯続く子育てのなかでの自信、乗り越えていく土台となっていくと考えられる。

3-5. 総合考察

本研究では、高齢出産をした母親が、子育てに希望をもち臨んでいけるようになるまでのプロセスを明らかにすることを目的とした。一般的な母親としての大変さに加え、高齢出産の母親だからこそ感じる負担感、困難感などの葛藤も見られた。そのような子育ての苦痛に対して一般的な問題解決をとるということを繰り返しながら、子どもの発達、ソーシャル・サポート、母親のパーソナリティが要因となって切替が起こると考えられた。この切替を経験することに

よって個別の問題解決を見つけていくことが、母親としての自信の第一歩になるのではないだろうか。母親が育児のわからなさの渦に入り込んでしまったとき、いったん、そこで立ち止まり気持ちに整理をつけ、もうそれでもいいかと意識を切り替え、自分のそれまでの認知から変えていこうとするのだと考えられる。この認知の変化は、子育てを主体的に楽しもうとする姿勢につながる。そのようなプロセスを理解することは、高齢出産した母親だけに限らず、すべての子育て支援に役立つと考えられる。

本研究の限界と課題について述べる。1点目に、母親が子育てにおいて自信を獲得していくプロセスの説明力や、類似する事例や現場で活用できる予測性を高めていくためには、更なるデータの追加が必要となる。2点目に、モデル図を精緻化するためには、高齢出産の母親のライフイベント（仕事との両立、親の介護等）の影響も反映されるようなインタビュー調査も検討する必要がある。

引用文献

- 1) 宮本桃英・安田華子・吉村智恵子 子育てにおける母親の主体性についての検討—子育て支援に通う母親へのインタビューを通して—名古屋女子大学紀要 第63号 p.381-391 2017
- 2) 浅賀万里江 三浦香苗 育児初期の母親が抱える心理的混乱への適応過程—語りの分析による質的検討—昭和女子大学生生活心理研究所紀要 Vol.13 p.55-68 2011
- 3) 池田和嘉子 母親のライフスタイル選択に関わる要因と子育て期の葛藤、子育ての負担感についての検討 立正大学心理学研究年報(4) 95-107 2013
- 4) 赤尾清子 山野則子 母親が子育てに行き詰まり脱出するプロセス—M-GTAによる分析—子ども家庭福祉学第12号 p.57-66 2012
- 5) 山野則子 田中淳子 杉岡利沙 浅野真弓 M-GTAによる「子育ての行き詰まりからの脱出」モデルの実践的活用 社会問題研究 2013
- 6) 横山美江 不妊治療と育児 周産期シンポジウムNo.20 p.91-97 2002
- 7) 木下康人 グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践：質的研究への誘い 弘文堂 p.28, 31 2003
- 8) 木下康仁 ライブ講義M-GTA実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて 弘文堂 p.96, 127 2007

* 本研究は名古屋女子大学総合科学研究所平成28年度プロジェクト研究「子どもの主体性を尊重した保育実践の研究Ⅱ」の一環である。

謝辞 本研究の主旨に御理解くださいました保護者のみなさま、保育園子育て支援スタッフのみなさま、また本論文執筆にあたり御助言くださいました保育実践研究会の先生方に、この場をお借りして心より感謝申し上げます。